2012年　**和本で見る書物史**

第２回　書物の歴史（古代中国と日本）

橋口（はしぐち）　侯之介（こうのすけ）

和本入門 pp28-33 装訂から見た和本の歴史

本全体のつくりを装訂(そうてい)という。そのうち和本の時代のつくりを**和装**という。奈良時代から千数百年の歴史がある。その伝統が残る一方、別の発展もとげた。今回は装訂の歴史から和本の基礎知識を得ていく。

中国書物の起源

文字は、中国の殷（B.C.11C から）あるいはそれ以前から亀甲や青銅器などに文字を彫っていたが、王がおこなう占い（祭政）に限られていた。

一定の文を構成する内容物（＝テキスト）を書いて複数の人に伝える役割は、木簡（もっかん）（木の札）や竹簡（ちっかん）（竹の札）が普及するようになって始まった。長い文は複数枚の簡を紐でつなげていた。孔子の時代（BC５C）に成ったと思われる。

漢字に残る書物用語

冊(サツ、サク)　冊とも。本を１冊２冊と数える起源である。

*これを日本でサツと読むのは音便。「う音」は言いにくく「つ」に変わりやすい（特急、竹簡)。一枚だけのものを短冊(タンザク)というのが本来の読み方。２枚以上をつなげたのを長冊といった。同音で「策」ともいった。

典(テン、のり)　この冊に丌（き）を加えて机上の書冊をさす。

編(ヘン、あむ)　冊を綴じていくこと。その綴じ糸。

版(ハン・バン)　竹でつくったものを冊とか典といい、木簡を版といった。

籍(セキ、ふみ)　字の書かれた文書を重ねておくこと。

いずれも今日の書物用語に残っている。

巻(カン・ケン、まき)はこれを保管するため、ぐるぐる巻いていく＝巻物の起源。

実用的な紙の製作開始

紙の発明は、後漢の蔡倫で起源 105 年のことといわれてきたが、最近の研究では前漢の遺跡から古紙が発見されており、さらに 200 年さかのぼると考えられている。しかし、古いものは麻の繊維に近いもので、文字を書きにくく保存に適さなかった。蔡倫によって製法や使用に格段の進歩があって、書籍の用途に用いられるようになったことを評価するのである。

植物の繊維を漉く製紙の方法は、その後改良されて 3、4 世紀頃にはかなり一般化した。麻でつくる紙が多い。

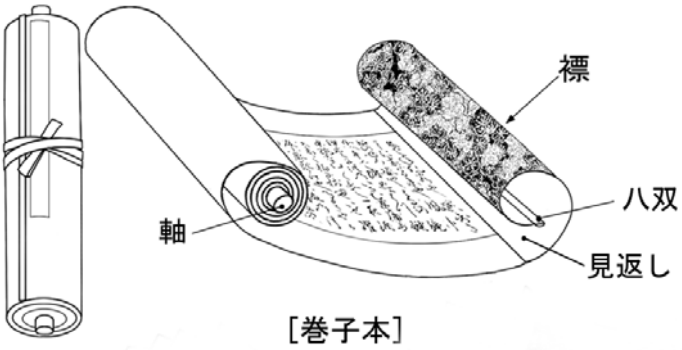
*現在でも本のベストセラーのことを「洛陽の紙価を高める」というが、これは晋の左思という人物が作った「三都賦（さんとのふ）」が評判になり都の洛陽の人たちが争ってそれを書写しようとしたため紙の値段が上がった故事による。三都とは、三国時代の蜀・呉・魏の都。賦とは、風物を記した韻文。洛陽は晋の都。**→「三都賦」の載る『文選（もんぜん）』の一節**

巡視舊里焉
三都賦序　左思
蓋詩有六義焉其二曰賦揚雄曰詩人之賦麗以則班固曰賦者古詩之流也先王採焉以觀土風見緣行猗猗則知衛地淇澳之產見在其版屋則知秦野西戎之宅故能居然而辨八方然相如賦上林而引嵩崙夏侯揚雄賦甘泉而陳玉樹青蔥班固賦西都而歎以出北門張衡賦西京而述以游海若假稱珍怪以爲潤色若斯之類匪帝於姦考之果木則生非其壤校之神物則出非其所於辭則易爲藻飾於義則虛而無徵目大玉危無當雖實非用侈言無驗雖麗非經而論者莫不詆訐其研精作者大氐舉爲憑草積習生常有自來矣今既思篆二京而賦三都其山川城邑則稽之地圖鳥獸草木則驗之方志風謠

巻子本

中国の南北朝時代の５世紀頃から、紙を貼りつなげて巻いていく**巻子本**(かんすぼん、けんすぼん)＝**巻物**(まきもの)が書物の形態となっていた。木製の軸を芯にして巻いていき、巻頭には保護のために絹や厚紙をつけた。

書物に用いる紙のことを**料紙**(りょうし)といい、そこに文字や絵が書かれ、それを何枚でも糊でつないでいく。これを**継紙**(つぎがみ)という。以後、唐代(7～10 世紀)まではこの形が主流だった。紙の発明から数百年間はこれが書物の形だった。本を１巻、２巻と数えるのはこの時の名残りで、現在でも全集物などはで使う。



［巻子本］

巻子の巻頭につける保護のための裂や紙を**標**(ひょう)＝表といった。これが表紙の起源である。めくれなどの傷みを防ぐために竹ひごなどを入れた。これを八双(はっそう)とか押え竹という。そこに紐をつけて、保管時にはそれを巻きつけておく。標の裏に貼る紙を**見返し**というのも日本では平安時代からの用語。

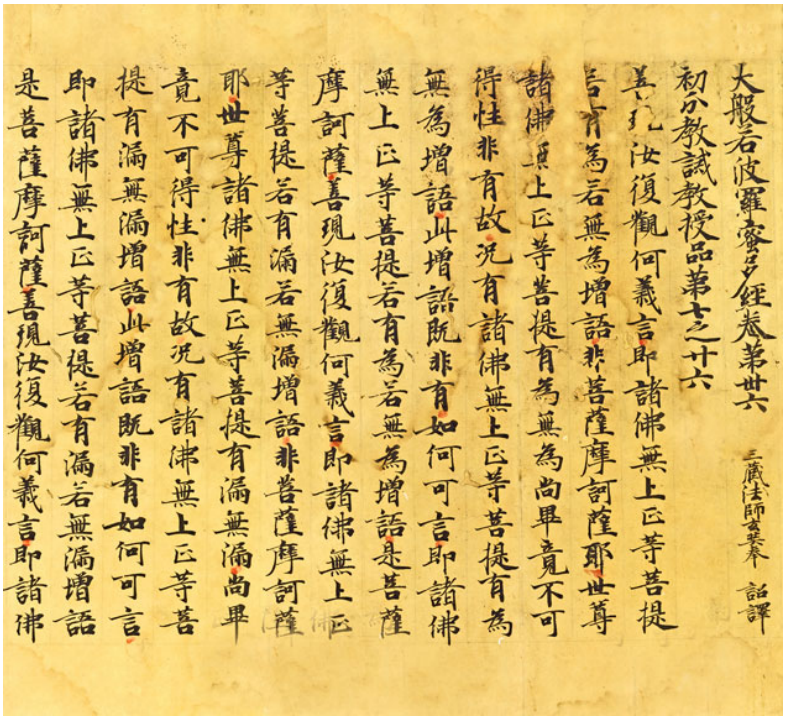
奈良時代の書物とつくりかた

奈良時代は経典の筆写（写経）が盛んだった。仏教の教えを実践するために最も良い功徳になると考えられていたのだ。とくに聖武天皇、その后である光明皇后(こうみょう)は熱心で自ら筆をとるだけでなく、紙の生産、写経を専門におこなう者＝**経生**(きょうせい)を官人としてかかえるなど、朝廷をあげて大量の写経を事業とした。

このときの官人が平安時代になると職人となって伝統を受け継ぐ。それを**経師**(きょうじ)という。

概ね高さは１尺（30 ㎝）くらい、一行 17 詰めで、白紙はいけない。

奈良時代は木簡も数多く書かれたが、単独の文書として用いられ、テキスト（文）とはしなかった。


大般若波羅蜜多經卷第廿六
初分教誡教授品第十之廿六
三藏法師玄奘 詔譯
其現汝復觀何義言即諸佛無上正等菩提
言有為若無為增語非菩薩摩訶薩耶世尊
諸佛無上正等菩提有為無為尚畢竟不可
得性非有故況有諸佛無上正等菩提有為
無為增語此增語既非有如何可言即諸佛
無上正等菩提若有為若無為增語是菩薩
摩訶薩善現汝復觀何義言即諸佛無上正
等菩提若有漏若無漏增語非菩薩摩訶薩
耶世尊諸佛無上正等菩提有漏無漏尚畢
竟不可得性非有故況有諸佛無上正等菩
提有漏無漏增語此增語既非有如何可言
即諸佛無上正等菩提若有漏若無漏增語
是菩薩摩訶薩善現汝復觀何義言即諸佛

経典のほかに、『日本書紀』や『万葉集』も巻物でつくられたたが、当時のものは現存しない。

巻物の扱い方

机や畳の上に置いて人の肩幅くらいずつ開いていく。まず表紙部分を丸めて、紐を中にしまう。右手で引き巻きながら広げ、左手は残りの巻き部分をやりすごす。巻き戻すときは、この逆をきちんとする。

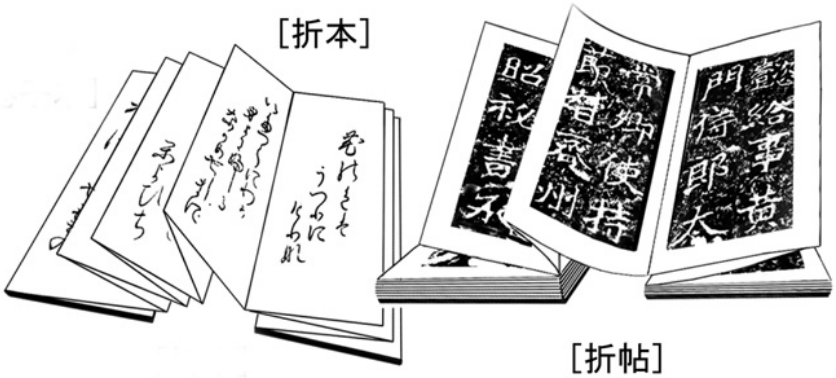
数える単位は巻とか軸という。

実用的に読むのに不便なため、次に述べる折本(おりほん)や冊子本にとってかわられるが、平安時代から江戸時代にいたるまで絵巻物はすたれなかった。物語、合戦図、道中図などは巻

物のほうに迫力があって、空間だけでなく時系列の動きが表現できる。兵法や礼法、各種の秘伝・免許も巻物に仕立てるのが伝統。
掛け軸(かけじく)は、これを縦に仕立てたもの。中世後半から茶室でよく使われるようになった。

折本

巻物では読みづらい。目的の箇所まで巻いていき、また元に戻すのが大変である。それを一定幅で折り曲げた状態の「折本」が考案された。
中国では経折装(きょうせつそう)といい、主として経典に用いられたのでこの名がついた。敦煌出土のものは、隋唐時代（7～10 世紀）のものが認められる。今でも僧侶の読経には、この折本が用いられている。
似ている装訂に折帖(おりじょう)というのがあって、一葉ごとに厚紙に書いたものを貼り付け、糊で継いでいく。石に彫った文字（石碑など）を墨で写し取るのを**拓本**(たくほん)というが、折帖にする習慣がある。今でも書道具屋で売っている。数える単位は帖（チョウ、ジョウ、テフ）。屏風はこのバリエーションともいえる。



千年もつ紙

奈良時代の経典がいまでも古書の市場に出てくる。民間に伝わったのだ。たしかに 1300 年前のものである。それでも紙は変質せず、墨も色が変わらない。ほんとうに和紙は千年以上の寿命があるのだ。今ある和本も丁寧に扱って虫の害を防げれば千年後にも残せるだろう。

講義の要旨は pdf にするので、http://www.book-seishindo.jp/seikei_tanq/　でダウンロードを。
質問は、専用メールでいつでも。　khashi@s.email.ne.jp

来週は「書物の歴史（平安時代）」がテーマ、和本入門　pp34-37 は読むこと。拙著『和本への招待―日本人と書物の歴史』（2011、角川選書）が詳しい。

テキスト

『和本入門―千年生きる書物の世界』、橋口侯之介、平凡社ライブラリー

参考文献

橋口侯之介『和本への招待―日本人と書物の歴史』、2011、角川選書
堀川貴司.『書誌学入門』,2010,勉誠出版。
陳国慶著・沢谷昭次訳『漢籍版本入門』,1984、研文出版
和年号、干支がすぐわかる年表は必備。市販としては『東方年表』(平楽寺書店)がある